日本行動計量学会会報

第4号
1974年10月5日

日本行動計量学会
事務局

東京都文京区本郷7－3－1
東京大学医学部保健
学科疫学教室内

欧文誌第一号刊行に当って

印東太郎

和文誌「行動計量学」とならんで欧文誌「Behaviormetrika」を、年一号ずつ刊行することは本学会設立の事点から決まっていたようであるが、はからずも私がその仕事に当ることになった。編集委員は総計四十五名おられたので、その中から理事長指名により、野崎昭弘、宮原英夫、佐伯胖、松原望、岩坪秀一、丸山久美子、の諸氏に実務をお願いすることにして第一号の編集を開始したのが昨年の秋であった。何しろすべてがfrom scratch（ゼロから）という状態であるから、まず出版社を探し、執筆要綱を決め、投稿を勧誘することから出発した。幸い日本出版貿易株式会社の協力を得ることができ、各分野から原稿も集り、第一号が刊行される運びになった。実は現時点では未だ現物は形になっていないが、この記事をお読みいただける頃には会員諸氏の御手許に届くはずである。従ってここに目次を紹介することはredundantというものであろう。

当分の間七十～八十ページのものが年一冊であるから、volumeという言葉を用いず、すべて№で統一することになっているので、これは「Behaviormetrika, №1，1974」である。表紙のデザインは林理事長の御紹介により、特にデザイナー佐藤敬之輔氏の手をわずらわせた。学会の専門誌としては、これは異例のゼイタクといわなければならない。

この第一号は、今後の本誌の性格を決定する枠組みとして作用するものと思われたので、編集には次の点に留意した。それは、その内容においても、そのスタイルに関しても本号を本誌の今後のあるべき姿の偏りなきサンプルとしたいということであった。もとより標本数が六では完全な代表になり得ないであろうが、分野としては統計学、心理学、社会学、スタイルとしても「数式だらけ」のものから一つも数式を含んでいないものに及んでいることは事実である。御投稿頂いた方々に対しては勿論、御助力頂いたすべての方々に御礼申し上げたいと思う。特に編集の実務に当たられた上記六氏の方々の御苦労は一方ならぬものであったことはここに明記しておかなければならない。

本誌は、毎年、九月をメドに刊行してゆく予定になっている。私共の理想は海外に相当数の定期講読者を獲得して外資をかせぎ、もって本学会の財政に寄与（より正確には学会の財政負担を軽減）したいということであるが、そのためには、内容が高水準でなければならないと同時に、刊行のスケジュールを狂わせないということも必要条件である。第二号に対する原稿〆切りは本年末としているが、できるだけ多くの方から御投稿頂けることを期待している次第である。また、海外にキャンペーンを行いたいので、各専攻の分野で、定期講読者になりそうな個人及び機関の情報をお知らせ頂ければ、それだけ上記の理想の達成される日が早まるであろう。（日本行動計量学会理事・欧文誌編集幹事代表・慶応義塾大学教授）

和文誌・欧文誌への投稿を！

和文誌第三号の〆切りは十一月中旬、欧文誌第二号の〆切りは十二月下旬です。奮って御投稿下さい。執筆要綱等の問い合せは事務局まで。

第二回学会総会盛会裏に終る

——九月二日～五日　統計数理研究所にて——

今年度の学会総会は、九月二日から五日までの四日間、統計数理研究所を会場として開催された。特別講演は、村上陽一郎氏の「時間をめぐる学際的問題」、藤井光昭氏の「時系列のモデルについて」小林庄一氏の「ヒトの適応能と海女」の三つであり、パネルディスカッションは、「人間研究と行動計量学」をめぐって、林知己夫氏の司会のもとに、宮原守男氏他五名のパネラー、印東太郎氏他二名のディスカッサントという陣容で展開された。一般講演は五十八件であり、昨年より六件増加している。

参加者総数は二百十八名を数えた。今回も東京周辺に居住する会員の方の参加が多かったのであるが、大阪からの十二人、札幌からの六人、名古屋からの五人、京都からの四人、福岡からの四人など、各地からの来会者の数もかなりの数にのぼった。参加者の所属機関を多いものから挙げてみると、東京大学（二十五名）、統計数理研究所（十名）、大阪大学（九名）、東京工業大学（九名）、慶応義塾大学（八名）、立教大学（八名）、東京理科大学（六名）、通産省製品科学研究所、早稲田大学、北海道大学、博報堂（以上各五名）、国立教育研究所（四名）、青山学院大学、未来工学研究所、お茶の水女子大学、通産省機械技術研究所、帝京大学、日立製作所システム開発研究所（以上各三名）、などとなる。このような参加者の内訳は、学会設立満一周年を迎えた日本行動計量学会の現況を、よく映し出していると言うことができるであろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第二回日本行動計量学会総会を省みて

豊川　裕之

第二回日本行動計量学会総会が終った直後に実行委員（林委員長は急用で欠席された）が集まって反省会をもった。その時、参加者がどのような印象ないし評価を持って帰ったかを知りたいと日頃の習性が頭をもたげたが、結局は我々が学際領域の研究者であるがゆえに、かみしもを脱いでフランクに話し合えるようにすることが大切であって、それにはどうしたらよいかということが中心的な話題になった。

防禦的に堅固に構えた姿勢での討論では得ることが互いに少なかったのではなかろうか。中にはその道の権威から親切にアドバイスされて発表した甲斐があった人もあり、無理なコジツケでしてやられたという苦い印象を刻み込んだ人もあり、反応がなく期待に反した人もいたに違いない。

この学会の特色は、専門化した領域で計量的方法を志向している人が一堂に会することにあるから、いわゆるタコツボから出て来たササラ型指向の集団である。そして領域や方法などのどれひとつをとっても、この学会を規定することはできないし、敢えてそれをすれば既存の専門領域の学会と同じになって、存在理由が稀薄になるだろう。

このように本学会のdefinitionがあいまいであって、前例のないものであるというだけでは何とも心もとない。しかし、それは会員各自の自覚と努力によって徐々にではあっても改善され、明確にされねばならないだろう。そのような考え方に立って、第二回総会実行委員は次のようにしめくくりをさせていただこう。

本学会が学際的で、特定の学問領域や方法論だけで規定できない新しい領域であるから、このような新しい皮袋を必要とする、したがって学会総会もそれに相応しいものでなければならず、それはおそらく炉辺談話や身上相談の雰囲気に似たあたりを探せばよいのではないだろうか。

諸賢の御健斗を祈りつつ、御協力に感謝します。（第二回日本行動計量学会総会実行委員会副委員長・東京大学助教授）

学会会則変更さる

――新理事として十名を追加承認――

第二回学会総会第一日目の総会議事において、理事の選任に関する条項についての会則変更が討議決定され、新しい会則による新理事十名が承認された。

会則の変更部分は第七条一項であり、その内容は以下の通りである。

旧「理事及び監事は正会員のなかから互選する。」

新「理事の半数以上及び監事は正会員の中から互選し、理事のその余は正会員の中から理事会で推薦し総会においてこれを承認する。」（ただし、本項で言う理事会とは互選された理事で構成されるもの）

なお、総会で承認された新理事は以下の諸氏である。

阿部裕（医）阪大医
大島正光（ＭＥ）東大医
南雲仁一（工）東大工
浦昭一（工）慶大工
青山博次郎（統）統数研
印東太郎（心）慶大文
三隅二不二（社心）九大文
村田昭治（経営）慶大商
京極純一（政）東大法
石村善助（法）都立大法

以上

理事担当業務の決定

学会総会第三日目に開かれた第五回理事会において、学会活動の各側面を担当する理事について、次のように決定された。

なお、（新）とあるのは新任であり、他は再任である。

◇編集委員会　林知己夫
◇和文誌幹事会　野元菊雄
◇欧文誌幹事会　印東太郎（新）
◇運営委員会　沢田央　林知己夫
◇講習会
◇月例シンポジウム　山本俊一
◇学会総会　肥田野直（新）
◇行動計量学シリーズ企画委員会（企画委員会で選出される委員長）（新）
◇事務局（会計）　柳井晴夫

以上

次回講習会の準備進む

本学会主催の講習会として、前回は「多変量解析法」というテーマの下に三日間開かれ、七十名余りの参加者を得て盛況であった。

次回については以下の通りである。

〈時期〉　十一月下旬（三日間）
〈テーマ〉　人工知能と行動計量
〈オーガナイザー〉　野崎昭弘氏

なお、場所と参加費については未定である。

研究会だより

評価問題研究会

人間に関する評価の諸問題を多面的に研究することを目的としてこのサブグループ研究会は、これまで二回の会合を持ってきた。参加者は延べ二十六名である。

第一回は、評価目標（次元）設定の理論の必要性、多次元的なデータをどのように一次元的評価として総括するか、目的と状況によって実態把握から評価へと持っていく場合の論理が異なるのではないか、等の諸点をめぐって活発な議論がなされた。

第二回は、池田央氏による話題提供を中心とし、成果でなくプロセスを評価する場合の方法論的問題、テストによる少数者（高能力者、異常者、等）の発見の予測的妥当性の問題、達成基準による評価（クライテリオン・リファレンス）に関する問題、等をめぐっての議論が交された。

第三回は、岡本栄一氏を話題提供者として、十一月頃に開かれることになっている。

この研究会の幹事は、国立教育研究所梶田叡一氏である。詳細の問い合せおよび参加申し込みは、梶田氏まで。

会費を納入下さい

本年度の会費を未納の方は、至急、事務局あて御納入下さい。正会員は二千円、準会員は千円です。送金には振替（振替番号　東京一四八〇五六）を御利用下さい。会費が順調に納入されませんと、和文誌および欧文誌の刊行に差しつかえが生じます。なお、会則により、長期間会費未納の場合には、学会を退会したものとみなされます。

会議議事録要旨

◇第三回理事会（八月十三日）
　於　統計数理研究所
　出席者　理事七名
1　欧文誌、和文誌進行状況報告。
2　四十八年度決算報告案、四十九年度予算案について検討し、一部修正の上で決定。
3　会則変更（理事選任の条項）について原案決定。
4　その他
◇第四回理事会（九月二日）
　於　統計数理研究所
　出席者　理事七名
1　会則変更承認後に推薦する追加理事候補十名の決定。
◇第七回運営委員会（九月三日）
　於　統計数理研究所
　出席者　九名
1　月例会を月例シンポジウムと改称することを決定し、今後の予定について協議。
2　サブグループ研究会の担当委員として、駒沢勉氏、岩坪秀一氏を決定。
3　講習会担当委員として小谷津孝明氏を追加、従来の丸山、野崎両氏と共に三名で運営に当たることを決定。
4　行動計量学シリーズ企画委員会の設置を理事会に提案することを決定。
5　情報収集小委員会報告。
6　その他
◇第五回理事会（九月四日）
　於　統計数理研究所
　出席者　理事七名
1　総会議事結果の報告。
2　行動計量学シリーズ企画委員会の設置を決定。企画委員八名を選任。
3　理事担当業務の決定。
4　来年度学会総会担当大学として青山学院大学、上智大学が候補に挙げられ、担当理事が交渉に当ることに決定。
5　運営委員会事業報告。
6　賛助会員拡大について協議。
◇第七回編集委員会（九月五日）
　於　統計数理研究所
　出席者　委員十七名
1　欧文誌編集幹事会報告。
2　和文誌編集幹事会報告。

月例シンポジウムの予定決まる

これまで、「行動計量学の課題」（第一回）、「因子分析法」（第二回）というテーマで月例会が持たれてきたが、九月三日に開かれた第七回運営委員会において月例会を月例シンポジウムと改称するとともに、以下のような予定で準備を進めることが決定された。

◇第三回月例シンポジウム
〈日時〉　十月二十六日（土）
～＊～＊～＊～＊～＊～
午後一時～五時
〈場所〉　統計数理研究所
〈テーマ〉　公衆衛生に関する諸問題
〈オーガナイザー〉　山本幹夫氏
◇第四回月例シンポジウム
〈日時〉　十二月十四日（土）
午後一時～五時
〈場所〉　未定
〈テーマ〉　行動計量学と大学教育
〈オーガナイザー〉　池田央氏

なお、第五回以降については、次のようなテーマで計画を立てることになった。

第五回／来年二月「ケース・スタディの計量化問題」丘本正氏にオーガナイザーを委嘱
第六回／来年四月「コンピューター関係」近藤暹氏にオーガナイザーを委嘱

行動計量学シリーズ刊行へ

企画委員会発足

行動計量学シリーズの刊行について、これまで統数研松原望氏を担当運営委員として下準備が進められてきたが、問題点も煮つまってきたので、このほど、正式に企画委員会を発足させることが決定された。理事会で承認された企画委員は次の八氏である。

〈理事会〉　青山博次郎（統）、山本俊一（医）、安田三郎（社）
浦昭一（工）、池田央（心）
〈運営委員会〉　松原望（統）、豊川裕之（医）、小谷津孝明（心）

編集後記

学会も満一周年を迎え、学会総会も盛会裏に終了した。しかし真に大変なのはこれからであろう。気取らぬ卒直な意見交換の場、それを可能にする人間関係を大事にしてゆきたいものである。

（梶田記）